

## リベリアの歴史（内戦～2014年）

中島正博/DFP 編集部

### はじめに

リベリア共和国（以下リベリア）の国民は特に1989年から今まで、辛酸をなめる時代を過ごしてきました。1989年から2003年までの内戦を耐えた後、2005年の選挙でアフリカ初の女性元首サーリーフ大統領が誕生、内戦で荒廃した国の再建を開始しました。その国家再建の過程で2014年エボラウイルス病の流行が始まりました。

このような内戦や恐ろしい感染症に見舞われるという、私達の想像を超える困難が続いているリベリアについて紹介します。この国を理解するには内戦に触れることが不可欠です。但しその内戦がリベリアのすべてではありません。本稿はリベリア内戦の状況と平和運動について書かれたリーマ・ボウイー氏の自伝『祈りよ 力となれ』

（2012年 英治出版）を主に参考にし、多く引用したことをお断りします。また内戦の戦闘集団に関する記事はWikipediaの「リベリア」と「リベリア内戦」（2014年9月18日閲覧）を参考にしました。



ボウイー氏著書

### 1 リベリアの国家形成に由来する紛争の原因

リベリアについて先ず紹介されるのは、アフリカ大陸の中ではエチオピアについて古い国であるということです。アメリカ合衆国で開放された黒人、同国で自由の身として生まれた黒人、そしてアメリカ大陸に向かう奴隷船から開放されたアフリカ人により、1822年に彼らの入植地としてリベリアが設立され、1847年に国家として独立しました。リベリアの誕生と共に社会に特権階級と搾取される人たちの格差ができました。ボウイー氏は以下のように述べています。

リベリアでは先祖の出自により、社会での地位が決まった。“コンゴ・ピープル”と呼ばれる奴隷船からきた入植者と、“アメリコ・ライベリアン（アメリカ系リベリア人）”と呼ばれるアメリカから来た人たち（その多くが混血で、肌の色が薄かった）が、政治経済界の特権階級を構成していた。彼らは、先住のアフリカ民族よりも自分たちのほうが、“文明化”されていて、より価値があると考えていた。先住民族には、クペレ、バサ、ギオ、グレボ、マンディンゴ、マノ、クラン、ゴラ、バンディ、ロマ、キシ、バイ、ベラがあった。

何世代にもわたって、特権階級はモンロビア市内や周辺、およびバージニアやケアリーズバークなどの郊外に集まり、アメリカ南部を思わせる広大なプランテーションを作った。そしてしっかりと権力を持ち続けた。皮肉だったのは、自分たちが

アメリカで受けたのと同じ仕打ちを、そのまま先住民に対してしたことだ。学校は別々。教会も別々。先住民族は召使にされた。まるで、誰かの家に入っていった食事や飲み物をもらい、そのあと家主を隅に追いやって「ここは私の家だ」と宣言するようなものだ。

社会的な不公平、富の不平等な分配、搾取—そして先住民族が自分たちのものを取り戻したいという思いが、多くの問題の一因になっていた。

(ボウイー2012:16-17)

## 2 最初の先住民政権

このような格差が一世紀以上続き、1980年に先住民クラン族のサミュエル・ドゥがクーデターにより政権を奪取しました。ドゥはリベリアで初めての特権階級出身ではない大統領であり、リベリアの先住民にとっては新たな平等の時代の始まりだと思われました。しかし期待は裏切られました。ドゥ政権以前は、特権階級と先住民族の間だけに差別があり、各民族の間は互いに平等で、異なる民族間での結婚も当たり前でした。しかしこの政権の下で各民族のアイデンティティが重視され始め、ドゥはお金と権力が手に入る仕事はクラン族に与えました。ドゥ政権は腐敗しており敵意と対立の拡大を産み出しました。1985年にギオ族出身のトーマス・クィウォンパが軍事クーデターを試みましたが失敗し処刑されました。その後、ドゥはクラン族中心のリベリア国軍をギオ族とマノ族が住む地域に派兵し、ギオ族とマノ族を復讐攻撃し、600人から1500人を大虐殺しました。チャールズ・テーラーはこの政権の政府で働いていましたが、横領をしたとされアメリカに逃亡しました。その後、テーラーは1989年に反政府活動を始めました。



サミュエル・ドゥ  
(Wikipediaより転載)



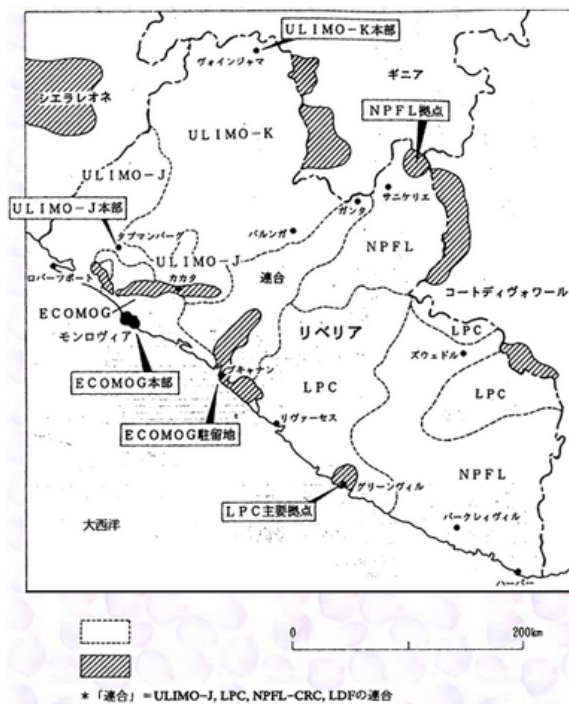
## 3 第一次リベリア内戦

チャールズ・テラーが蜂起し第一次リベリア内戦が1989年から1996年まで続きました。この内戦の期間、チャールズ・テラーが率いる反政府組織「リベリア国民愛国戦線 (NPFL)」の他に、クラン族のジョージ・ボレイが「LPC」という武装勢力を結成しました。後の1993年にはテラーの NPFL と交戦し戦争が全土に拡大しました。NPFL から分裂したプリンス・ジョンソンが率いる INPEL がドゥ大統領を捕らえ拷問の末に処刑しました。これによりドゥ政権は崩壊し、エーモス・ソーヤーが暫定政権を立てますが、NPFL はこれを求めず、1992年からソーヤー派との戦闘が激化しました。NPFL の同胞だったシエラレオネ反乱軍のアハメド・フォディ・サンコーが率いる統一革命戦線 (RUF) も戦闘に加わり、戦乱は国境を越えて広がりました。アルハジ・クロマーが率いるマンディゴ族のイスラム系組織 ULIMO「軍事派」も蜂起しました。またクロマーの ULIMO「軍事派」から分裂したルーズベルト・ジョンソンが ULIMO-J の新組織を結成し蜂起しました。



チャールズ・テラー  
(BBC ホームページより転載)

1990年より西アフリカ諸国経済共同体監視団 ECOMOG が内戦に介入するためにリベリアに派遣されました。1995年に全紛争当事者8派による和平協定が締結(アブジャ合意)、ウィルトン・サンカウロが国家評議会議長に就任し、1996年に停戦が発効しました。この内戦により15万人が死亡し、30万人以上が国外へ難民となりました。1997年に大統領・副大統領・上院・下院の統一選挙が実施され、NPFLのチャールズ・テラーが大統領に就任しました。



武装勢力の配置 (1994 年末)  
出典: West Africa. December 12-18, 1994, p2114

[http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/2003/atl\\_4/data\\_23.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/2003/atl_4/data_23.html)

#### リベリア略年表（建国～第一次内戦終結まで）

1847年	リベリア建国
	...
1980年	サミュエル・ドゥのクーデター、政権奪取
1985年	ギオ族出身者による軍事クーデター失敗 国軍によるギオ族とマノ族復讐攻撃・大虐殺
1989年	チャールズ・テラー蜂起、第一次リベリア内戦
1990年	サミュエル・ドゥ殺害
1993年	交戦がリベリア全土に広がる
1995年	和平協定調印
1996年	停戦発効
1997年	統一選挙実施 チャールズ・テラー大統領就任

出典:DFP 編集部作成

## 4 第一次リベリア内戦中の国民の惨状

先に紹介した第一次リベリア内戦中の国民の生活は悲惨きわまるものでした。政府軍も反政府軍も市民を犠牲にしました。政府軍の行状についてボウイー氏の記述を借りて紹介します。

「やめて！ やめて！ 助けて！」

叫び声は果てしなく続いた。私たちはみな目を覚ましていた。夜明けになって外出禁止時間が終わると外へ出てみた。通りは人であふれ、うわさが飛び交っていた。一皆殺し…虐殺…教会…。

すぐに分かった。ドゥの兵士がギオ族とマノ族を狙い始めたとき、リベリア教会協議会は危険にさらされている人に安全な場所を提供するという意図的な決断をした。たとえ兵士が容赦ないとしても、神の家で暴力を振るうことはしないだろうと、教会協議会は信じていたのだ。セントピーターズ教会とそこに隣接する高校には、何千人もの大人や子供が非難していた。だがその晩、指揮官が言っていた「次に来るもっとひどい奴ら」、つまりマシンガンやマチューテ（なたのような刃物）をもった別の政府軍が教会に押し入った。私たちが祈りを捧げた信者席で、女性の日には夫や子供たちが母親の服に花を飾った場所で、兵士がレイプし、切りつけ、撃った。

なかにいたギオ族とマノ族は、ドアを押し開けて銃弾のなかへ走り出したのだろう。通りの至るところに死体があった。女性も、男性も、赤ちゃんも。血まみれになって死んでいる妊婦がいた。死んだ子供を抱いている男性の手には、まだ哺乳瓶

が握られていた。姉たちは、確かな証拠を見るまではとても信じられないという様子で教会のなかへ入っていったが、私にはできなかった。

(ボウイー 2012:47-48)

上記は政府軍の行状ですが、反政府軍についてもボウイー氏は続けて書いています。

もはや、誰もこの現実を否定することはできなかった。チャールズ・テラーはブルキナファソとリビアで軍事訓練を受けたことがあり、彼が率いる NPFL (リベリア愛国戦線) の兵士は、ブルキナファソとコートジボワールの仲間から武器をもらっていた。リベリア政府軍から敵視されている人たちは、誰でも武器をもらえた。テラーは地方で、戦争孤児などの男の子を集め“少年部隊”として組織した。部隊の子供たちはテラーのことを“パパ”と呼んでいた。

テラー軍はクラン族とマンディンゴ族を、北部のロファ州やモンロビアの南にある沿岸都市のブキャナンで何百人も虐殺した。テラー軍とプリンス・ジョンソンの勢力はモンロビアまで数キロのところまで迫っていた。侵攻しながら両軍は水道や電気や電話を遮断し、シエラレオネへの逃げ道をふさいだ。

ボスニアやルワンダやコソボなど、世界のあらゆる場所で起こっているのと同じだった。社会のバランスが変わり、何十年も抑圧されてきた怒りが噴出したのだ。そうなったら、もう何もかもが変わってしまう。



リベリアの少年兵の姿を描いた映画「ジョニー・マッド・ドッグ」の劇中シーン  
(映画公式ホームページより転載)  
<http://www.interfilm.co.jp/johnnymaddog/>

1996年に内戦が終わり、1997年に選挙が実施された時の様子をボウイー氏は次のように語っています。

1996年終盤に、各派はまた別の和平条約に調印した。だが、その頃には国は壊滅状態だった。国の経済を支えていた船籍登録サービス、材木、ゴム、鉄鉱、ダイヤモンド山などの産業は消えていた。電気や水道はなく、道路は通行できず、学校や病院は閉鎖されていた。すでに壊れている信号を支えていたポールまでもねじ曲

がっていた。兵士は面白半分に、立っているものには何でも銃を向けたのだ。

<中略>

1997年7月に選挙が実施された。何人かが立候補し、そのなかにはエレン・ジョンソン・サーリーフもいた。選挙ではテラーが大差で勝利し大統領となった。

「テラーは母を殺し、父を殺した。でも、私はテラーに投票する」テラーの支持者はこんなスローガンを叫んだ。リベリア人の頭が変になったのではない。ただ、心の底から疲れきっていたのだ。テラーが国を破壊した。だから、彼に元通りにしてもらおう。確かにテラーはモンスターだ。でも欲しいものを手に入れたら、たぶん人間に戻るだろう。大切なのは戦闘が終結することだ。何年かあと、次に何が起こるかが分かったとき、この頃の短い平和な期間は、“第一次内戦の終了”と呼ばれることになった。

(ボウイー 2012:103-104)

つかの間の平和が訪れました。ソーシャルワーカーの資格をもっていたボウイー氏は、リベリアのさまざまな人びとのトラウマヒーリングに携わっていました。元少年兵にも向き合いました。女性のボウイー氏に対して、元少年兵は居直って脅かすが、それに動じないため、彼らはボウイー氏を「将軍」と呼び始めました。その時のことを以下のように語っています。

少年たちが私を将軍と呼び始めたこの日から、彼らは私を真に受け入れ始め、私は彼らについて恐ろしい外見からは分からないことを知ることになった。中年女性をレイプするのがいいと自慢した少年は、十二歳のときに反政府グループに参加した。男になれると思ったからだ。いまや彼は足を切断され、母親は一本足の子供を生んだ覚えはないと言って、彼に背を向けた。

クリスチャン・ジョンソンは、昔はとても背が高かったのだろう。だが、彼はいま両足を失っている。サム・ブラウンは、自分の家族が村から逃げ出したとき八歳か九歳だった。家族には子供が大勢いたので、サムが取り残されたことに母親は気付かなかった。村に移って来た兵士が彼を水汲みとして働かせ、十歳のときに少年部隊に入った。あるとき、待ち伏せされて腕を撃たれ、細菌に感染して腕をなくした。いまは十五歳でアルコール中毒だ。

<中略>

元少年兵たちが行った悪行を許すことはできない。でも私は、必ずしも心地よい感情ではなかったものの、彼らに対して哀れみや同情を感じるようになった。リベリアの誰もが少年たちを嫌っていた。モンロビアでは、彼らが物乞いをしていると人々はツバを吐いた。「チャールズ・テラーに金をもらえ！ 足を取り戻して働け！」私が彼らを助けていると分かったら、「なぜ？ やつらに親を殺された子供たち

が大勢いる。その子たちを助けたら？」といわれた。

私も自分の頭がおかしいのではと感じるときがあった。だが、少年たちは、自分がなぜレイプされたのか、略奪したのか、殺したのか分かっておらず、あまり覚えてもいなかった。それほどアルコールや麻薬でハイになっていたのだ。彼らは利用され、使い尽くされ、捨てられた。戦争は、私の子供時代を破壊したのと同様に、彼らの子供時代をも破壊した。私たちの怒りを受けるべきなのは、チャールズ・テラーやプリンス・ジョンソン、ルーズベルトやアルハジ・クロマーらだと思う。戦争を始めて泥沼化させ、自分の権力への野望のために、あらゆる世代の生活を滅ぼした人たちだ。

(ボウイー 2012 :131-133)

## 5 第二次リベリア内戦

第二次リベリア内戦は 1999 年から 2003 年まで続きました。以下は Wikipedia の「リベリア内戦」からの引用です。

テラー政権でひとまず内戦は終結したが、テラーはシエラレオネの同胞のサンコーに武器支援と共にダイヤモンドを密輸していたため、アメリカなどから厳しい経済制裁下に置かれ、内戦が終わっても国の復興はうまく出来ず、状況は悪いままだった。1997 年テラー大統領暗殺未遂事件が起き、ECOMOG が ULIMO-J のマディソン・ウィオンら 3 名を逮捕した。

そんな不満からついに 1999 年頃からセクー・コネ率いる反テラーの武装勢力リベリア民主和解連合 (LURD) やトマス・ニメリー率いるリベリア民主運動 (MODEL) の武装勢力が蜂起し勢力を拡大、2003 年には首都モンロビアへ侵攻した。この時点ですでにテラーの権力は弱体化しており、6 月 17 日には政府と停戦合意するに至った。その後アメリカなどによる圧力や、国連平和維持軍と 800 人ほどのアメリカ陸軍の到着などから、テラーはナイジェリアに逃亡した。

(Wikipedia 2014 年 9 月 18 日閲覧)

## 6 第二次リベリア内戦を終結させた女性たち

第二次内戦を終結させたのは市民、特に女性たちによる平和運動が、テラーや武装勢力に大きな影響を与えました。トラウマヒーリングの活動をしていたボウイー氏は、「平和構築」のための女性による平和活動を始めていました。反政府武装勢力の LURD が首都近郊で銃撃戦を起こし、2002 年にテラーは非常事態宣言を発しました。

命令に抵抗する者やグループは誰もが罰せられる。再びリベリアに影が差し始め

ていた。＜中略＞すべてが張り詰めていた。テーラーが非常事態を宣言したあと、モンロビアの新聞社が一社閉鎖され、記者が逮捕されて殴打された。テーラー大統領の特殊作戦部隊や反テロリスト部隊がモンロビア周辺で奇襲作戦を行い、市場や国内避難キャンプを襲った。家々は略奪され、反対派と疑われた人々が殴られるか殺された。若者や少年たちが無理やり軍隊に入れられていると聞き、親たちは子供が捕まらないよう学校に行かせなくなった。

(ボウイー 2012:166-167)

2002年12月に女性の平和活動団体が、キリスト教徒とイスラム教徒の連携を宣言した。そしてキリスト教徒とイスラム教徒が交互に並んで、200人の女性が町を歩いてモンロビアの人びとを驚かせた。2003年の初めにLURDから分離した反政府グループのリベリア民主運動MODELがリベリア南東部地域を支配して、新たな殺戮、略奪、レイプの暴力の嵐がその地方を席卷した。戦闘は続き首都モンロビアに近づいてきた。

(ボウイー 2012:182-183)

ボウイー氏たちが組織する女性平和運動の団体は、ラジオを通して女性に呼びかけ、2003年4月11日の朝、市庁舎前に平和を訴える白い服を着た数百人から千人の女性たちが集まりました。

私たちの要求は超党派的で、単純明快だった。政府と反政府勢力は、ただちに無条件で停戦を宣言すること。政府と反政府勢力は話し合いを行うこと。仲裁を行う勢力が軍隊を配備し、リベリアに派遣されること。

「これまで私たちは口を閉ざしていました」。私は群集に向かって話した。「しかし、戦争で人が殺され、レイプされ、人間性を奪われ、病気に感染し、子供や家族が傷つくのを見て学びました。私たちの未来は暴力に『ノー』と言い、平和に『イエス』と言うなかにあるのだと。平和が実現するまで、私たちは決してあきらめません」

「平和！ 平和！」女性たちは叫んだ。 (ボウイー 2012:191)

＜中略＞

要求に答える期間として、私たちはテーラーに三日間の猶予を与えた。それまでに返事がなかったら、座り込みを行う計画だ。テーラーからは反応がなく、私たちは計画の実行にとりかかった。

意図して挑発的な動きをとった。テーラーは、誰も自分はずかしめてはならないと言った。だから、私たちは反対に彼はずかしめる。劇的で目に見える行動をとり、女性による要求を無視できなくするのだ。

短期間で慎重に計画を練った。WIPNET(Women in Peacebuilding Network)のミ



ーティングは二四時間体制で行われ、ようやく横になったときには頭のなかをスローガンがぐるぐる回っていた。座り込みの場所として選んだのは魚市場近くのグラウンドで、私が子供の頃にはサッカーやキックボールをして遊んだ場所だ。そこには大勢が終結でき、タブマン通り沿いにおいてモンロビア市民の多くが日に一度は通る。テラーも一日に二回、キャピトルヒルへの行き帰りに通過していた。私たちはこの抵抗運動が政治ではなく平和に焦点を当てるよう注意し、私たちが自ら作成した超党派のポスターやプラカードしか認めないこととした。非暴力の活動だけを許可する。全員が平和を象徴する白い服を身に付ける。WIPNET のロゴが入った白いTシャツと、白いヘアタイだ。

(ボウイー 2012:191)

<中略>

座り込みの初日となる四月十四日の朝、私は夜明け前に起きて暗いなかを歩いていった。一番乗りだった。空が明るくなって周りを見回した。抵抗運動を成功に導くためには、少なくとも数百人が必要だった。ついに最初のグループが到着した。また別のグループ。太陽が上がった。いくつものディーゼルエンジンの音が聞こえ、私のほうに向かってバスが並んで走って来た。トラックも交じっている。女性をいっぱいに乗せたトラックだ。グラウンドには 100 人が集まった……300 人、500 人……そして 1000 人になった。

涙があふれ、私は祈り始めた。次々と女性が集まっていた。1500 人……。私たちは参加者がどこから来たのかを尋ね、一部の政府機関がその日を休みにしたことを知った。女性向けのプログラムを展開する NGO は、スタッフに参加を要請したという。大学生や女性教授もいた。2000 人以上がグラウンドに集まっていた。市場の商人。難民キャンプから来た避難民。なかには何時間も歩いてきた人もいたし、あまりにも服が古びていて白には見えない人もいた。ある女性は頭にカーテンの布を巻いていた。白いものはそれしかなかったそうだ。

(ボウイー 2012:193-194)



座り込みに参加する女性たち ©1996-2013  
omeninworldhistory.com

この座り込みのときにテラーの車列が通過しました。道路側にいる女性たちは背中を向けるか、撃たれる覚悟をしていました。返答のためにテラーに与えた 3 日間が過ぎ、何も連絡がなかったので女性たちは国会の外へ集まりました。しかし大統領からの反応はなくグラウンドへ戻り、さらに 3 日が過ぎると、報道機関にテラーの持ち時間はなくなったと伝え、国会に戻って駐車場を埋め尽くし、誰も出入りできないようにしました。再びボウイー氏たちはテラーが面会するまで 3 日間の猶予を与えると公式に宣言しました。そしてグラウンドに戻って座り込み続けました。グラウンドに集まった女性たちはスローガンを歌にしました。「平和が欲しい。戦争はいらない。／子供たちが死んでいく— 平和が欲しい。／苦しみはもうウンザリー 平和が欲しい。／逃げるのはもうウンザリー 平和が欲しい。」

国会に行ってから約一週間後に、国会の議長がグラウンドにいたボウイー氏のところまで来て、テラー大統領がボウイー氏たちと 4 月 23 日に会う、とのメッセージを伝えた。そして 4 月の終わりに LURD の指導部がテラーと和平交渉を行うことに合意しました (ボウイー 2012:194-198)。

ECOWAS と国連によるコンタクト・グループが、テラーと反政府勢力のあいだの和平交渉を 6 月 4 日からガーナの首都アクラで行うことを決めました。ボウイー氏たちはアクラへ行って交渉が進むよう圧力をかけ続けました。その最中にシエラレオネの戦争犯罪法廷がテラーの逮捕をガーナに依頼しました。理由は、シエラレオネのサンコーが率いる革命統一戦線が、10 年にわたり行ってきた殺人や手足の切断、レイプなどに関して、テラーに「重大な責任がある」として、国連とシエラレオネの法廷が極秘でテラーを起訴していたからです。しかし、テラーは逮捕される前に、ガーナを脱出してリベリアに戻りました (ボウイー 2012:215-217)。この後、反武装勢力 LURD はモンロビアに三度の攻撃を行いました。

それが身の毛もよだつようなものだったので、第一次、第二次、第三次世界大戦として知られるようになった。殺人とレイプの渦が巻き起こり、町中で激しい戦闘が行われた。何日もの砲撃により多くの建物が燃やされ、がれきやゴミ、壊れた家具の破片などが歩道に散らばった。どの家も、どの店も、略奪され破壊された。人々は藁きょうのカーペットの上を走って逃げ、けが人を手押し車や背中に載せて運び、必死になって海外のボランティアが運営する臨時の診療所に向かった。国立病院はただの一つも開いていなかった。

「われわれはモンロビアを放棄しない」とテラーは叫んだ。「通りの一つひとつ、家の一軒一軒をかけて戦う！」

シエラレオネとギニアに続く道路、モンロビアから西に向かう道路は封鎖された。国連安全保障理事会は、多国籍軍の配備の可能性について話し合う会議を開き、アナン事務総長はアメリカに介入を依頼した。

他方、ガーナのアクラでボウイー氏たちは、一向に進まない和平交渉を前に進めるために、LURD、MODEL、テラーの代表者、リベリアの政党、市民社会グループに対して、強硬手段に訴えました。和平協定が結ばれるまで会議室から誰も出さないよう、女性たちを率いて会議室の入り口のドアの正面に座り込みを始めたのです。

8月4日に西アフリカ平和維持軍がリベリアに到着しました。群衆は通りに並んで涙を流し、歓迎しました。アクラの和平交渉はその後、遅れることなく進みました。8月11日に、チャールズ・テラーは大統領を辞任し、ナイジェリアに亡命することに合意しました。8月14日、反政府勢力はモンロビアの包囲をやめ、アメリカ軍がアフリカの平和維持軍を支援するため上陸しました。15日には最初の国際援助の船が到着した、3日後、LURD、MODEL、テラーの代表が「アクラ包括和平合意」を締結しました（ボウイー 2012:227-231）。

## 7 サーリーフ政権の誕生

2003年10月に暫定政府が発足しました。2005年に暫定政府の下で大統領選が行われ、11月8日の決選投票によって、国連開発計画の元アフリカ局長エレン・ジョンソン・サーリーフが、アフリカ初の選挙による女性大統領になりました。2006年3月に戦争犯罪などで起訴されていたテラー前大統領が亡命先のナイジェリアで身柄を拘束され、シエラレオネに移送されました。その後、オランダのハーグにある国際刑事裁判所で開かれることになったシエラレオネ国際戦犯法廷で審理が行われ、2012年4月26日に有罪判決が下されました。（Wikipediaの「リベリア」2014年9月18日閲覧）。

サーリーフ大統領は2011年の大統領選挙で再選されました。外務省のホームページによれば、リベリアの現状は以下のように紹介されています。

政権第二期目のサーリーフ大統領の指導力と、多くのドナーの支援により、国民和解、法整備、治安強化、貧困削減、行政サービスの改善などあらゆる分野において、国の再建・復興が進められている。経済面においても、天延資源・エネルギー開発やインフラ開発等を推し進め、2009年以降、平均7%以上の経済成長を維持している。近年は海域での石油資源など、日系企業を含む外国企業の対リベリア投資への関心が強まりつつある。しかし、内戦終結から約10年が経過し、国内の治安情勢や国民生活は改善されたものの、内戦の影響による若者の失業問題、コートジボワール難民やリベリア帰還民の流入、元兵士の社会統合、貧困層の拡大等の深刻な社会問題が残されている。同国が再び不安定な状態に逆戻りをしないためには、内戦で破壊されたインフラの復旧、行政サービスの拡充、人材育成、農業生産性の向上等、中・長期的な視点に立った復興・開発支援を行うことが重要である。



大統領就任式でのエレン・ジョンソン・サーリーフ  
(Wikipedia より転載)

リベリア略年表（第二次内戦～現在まで）

1998年		ECOMOG、和平を目途に完全撤退
1999年		反テラーの武装勢力の蜂起 第二次リベリア内戦
2002年		国家非常事態宣言
2003年	4月	女性たちによる座り込み
	6月	停戦合意
	8月	チャールズ・テラー大統領就任、ナイジェリアへ亡命
	10月	暫定政権発足
2005年		エレン・ジョンソン・サーリーフ大統領就任
2011年		チャールズ・テイラー元大統領、シエラレオネ特別法廷にて有罪判決
2012年		エレン・ジョンソン・サーリーフ大統領再選
2014年	8月	世界保健機関(WHO) 西アフリカエボラウイルス病について、「緊急事態」宣言
	11月	サーリーフ大統領、エボラウイルス病の感染防止に伴う非常事態宣言を解除

DFP 編集部作成

おわりに

リベリアの内戦とその後について紹介しました。エボラウイルス病の流行により、リベリアは隣国と比較しても最悪の犠牲者を出しています。内戦によって国のインフラや行政サービスが破壊され、その再建途上にこの感染症に襲われたことが、犠牲者の規模を大きくしているのではないかと思います。この国は不幸な内戦を乗り越えて、国の再建を始め間もない現在、恐ろしい流行病に襲われたのです。私たちの支援が少しでもリベリア国民の不幸をやわらげることを願います。

## 引用文献

リーマ・ボウイー. 2012. 『リーマ・ボウイー自伝 祈りよ 力となれ』英治出版

Wikipedia : 「リベリア」と「リベリア内戦」(2014年9月18日閲覧)

外務省ホームページ : ODA (政府開発援助) 国別地域政策・情報 (2014年9月18日閲覧)